

春一番

登場人物

1. 松本由美子
2. 岩崎みゆき
3. 岸 凉子
4. 犬田裕美
5. 山口恵子
6. 原田敏江先生
7. 由美子の友達

◆二月十三日(金曜日)

舞台は七つ森中学校の放送室。舞台奥下手に入り口があり、客席側にメインとなる放送機材がおかれている(二本のマイク、カセットデッキなど)。そしてその上には窓があり、そこから校庭を見ることができる(ただし、あるという想定で実際の舞台には窓は存在しない)。両側の壁の前には長机が置かれ、その上には様々な放送機器が載せられている。そんな放送室で給食時の校内放送が行われようとしている。放送を行うのは四人の放送部員。四人の名前は松本由美子、岩崎みゆき、犬田裕美、岸凉子。中央で放送を担当しているのは松本由美子と岩崎みゆきの二人。二人は揃いのセーターを着ている。

由美子 こんにちは、二月十三日・金曜日、お昼の校内放送の時間がやってきました。

みゆき 今日は部活動紹介の最終回。最終回は私たち放送部について紹介します。それでは、まずはじめに部長の松本由美子さん。

由美子 はい。

みゆき 部員は何名ですか。

由美子 私を含めて全部で四人です。

みゆき えーっ、たったの四人なんですか。

由美子 はい。そして、四人とも三年生なんです。

みゆき 三年生？今二月ですよ。普通三年生は部活を引退しているんじゃないですか。

由美子 運動部とかはそうですね。でも、うちは違うんです。

みゆき いったい放送部はどんな活動をしているんですか。

由美子 活動の中心はお昼の校内放送です。三年間ずっとこの放送を続けてきました。

みゆき それだけなんですか。

由美子 それだけなんです。

みゆき それでは、最後に一言お願いします。

由美子 (わざと作った悲しみの表情で)私たち放送部は、私たちの卒業とともになくなります。でも、七つ森中学校放送部は、永久に不滅です。

みゆき …

由美子 (彼女らが行っていたのはDJごっこだった)これじゃ紹介できないか。

みゆき 永久に不滅どころか、私たちがいなくなったとたんに放送部は滅亡だよ。

裕美 後輩、一人も入らなかったね。

由美子 悔しいな。放送部なくなるの。何か残せないかな。私たちがここにいたっていうこと。

凉子 みんなで落書きしていかねー。

由美子 そういうことじゃなくってさ。

そこに元生徒会長・山口恵子が現れる。

恵子 入っていい？

由美子 (あっ)どうぞ。(放送部員に)ほら、来週の月曜日の「あなたにインタビュー」のコ

ーナー、会長のインタビューだから。

恵子 もう会長引退したけど。

由美子 まっ、そうだけど、やっぱ会長は会長だから。ということで、よろしく。

恵子 (うん)

由美子 インタビューの内容、こないだ渡した紙の通りだから、答え決まった。

恵子 まあ、

みゆき インタビュー誰がやるの。

由美子 (うん)インタビューは私一人で大丈夫かな。当日生で放送する部分だけみゆきが読んでくれる。(そう言ってみゆきに原稿を渡す)

みゆき オーケー。(由美子から渡された原稿を見て)こんにちは、二月十六日、お昼の校内放送の時間がやってきました。月曜日の今日は「あなたにインタビュー」をお届けします。

由美子 それじゃ、ここから録音するから。

由美子が録音ボタンを押す。

由美子 今日は元生徒会長の山口恵子さんにインタビューします。インタビューするのは、私、松本由美子です。山口さん、よろしくお願いします。

恵子 よろしくお願ひします。

由美子 あと一ヶ月で、卒業ですね。今どんな気持ちですか。

恵子 あっという間の三年間だったなって、そう思っています。

由美子 生徒会長として、一番の思い出は何ですか。

恵子 私たちにとって最後の七つ森フェスティバルです。その中でも特に思い出深いのが『青い鳥』の上演です。劇を作り上げるのはとっても大変でした。でも劇が終わった後の拍手は今でも心に残っています。

由美子 後輩に一言お願いします。

恵子 七つ森中学は本当に素晴らしい学校です。自慢できることがたくさんあります。私はこんな素晴らしい学校で生徒会長をやれたことを誇りに思っています。七つ森中学校の一・二年生の皆さん。どうかこの七つ森中学校を更に素晴らしい学校にしてください。みなさんならきっとできます。

由美子 それでは最後の質問です。山口さんにとって七つ森中学って何ですか。

恵子 かけがえのない宝物です。

由美子 ありがとうございます。これで今日のインタビューを終わりにします。今日のゲストは元生徒会長の山口恵子さんでした。

由美子が録音を止める。

由美子 お疲れ様。

恵子 どうも。

由美子 放送は来週の月曜日だから。

恵子 月曜日…。そんなすぐなんだ…

由美子 うん。(あっ)忙しいところありがとう。

恵子 じゃあ、これで。

恵子が放送室から出て行く。

みゆき 一番の思い出は『青い鳥』の上演か。山口は『青い鳥』で主役のチルチルやっ
て思い出になったろうけど、私たちにとっては最悪の思い出だよ。ね、由美子。

由美子 (えっ)…うん。

裕美 何で？

みゆき 私たち、チルチルとミチルを希望してたんだ。私がチルチルで由美子がミチル。でもオーディションも何にもなしでチルチル役、山口になったんだ。生徒会担当の山城が来て、主役は山口さんにやってもらうからって…。で、結局、由美子もミチル、やんなかったんだよね。

由美子 みゆきと一緒にやりたかったから。

涼子 山口、主役取るために、先生に頼みに行ったって噂だよ。

みゆき 知ってる。だから私、言っちゃったもん「ひいきされてる人はいいいよね」って。

涼子 山口、何て？

みゆき 黙ってた。

涼子 でも、そこまでして主役やりて一かな。

みゆき やりたいんじゃない。

裕美 生徒会長って面白いの？

みゆき 面白いとかじゃなくていかに役に立つかって問題でしょ。

裕美 何かの役に立つの？

みゆき 立つんじゃない、受験とか。だから山口、もう高校決まってるじゃん、推薦で。

涼子 (ああ)、七つ森女学院。

みゆき (嫌みな感じで)すごいよね、名門七つ森女学院に試験なしで。

涼子 (あっ)由美子のお姉さん、女学院じゃなかったっけ。

由美子 (うん)人間関係大変みたいだよ。あそこ半分は女学院中学からあがって来るじゃない。中学から来る人たちみんな人間関係ができていて、姉貴みたいに高校から入ると、なかなか溶け込めないって、愚痴言ってた。

裕美 あー、あたしそんなところ行きたくない。

涼子 心配いらなくて、行きたくても行けないから。

裕美 (笑って)そうだね。

涼子 裕美、受ける高校決まった？

裕美 うん。

涼子 どこ？

裕美 うん…。二つ森。

涼子 私立の？

裕美 うん。

凉子 （あっ）あたしも受けるよ、二つ森。由美子もみゆきも受けるよね。

由美子とみゆきが頷く。

裕美 でも、滑り止めでしょ。いいな、滑り止めでも受かるって。

由美子 （壁の時計をみて）そろそろ五時間目始まるよ。

凉子 由美子、あたし保健室に行くってゴジラに言っというて。

由美子 何で？

凉子 今日十三日の金曜日だから…、ゴジラの授業には出たくねー。

由美子 十三日の金曜日だから？

凉子 嫌な予感がすっから。

由美子 後で、どうなっても知らないよ。

凉子 いつものことだから。

凉子が放送室から出て行く。

由美子 裕美、今日も？

裕美 （頷く）

由美子 わかった、山城先生に言っておくね。

裕美 （頷く）

裕美が一人放送室に残る。

暗転

◆ 二月十四日(土曜日)

午後の放送室。由美子が裕美に勉強を教えている。そこにノックの音。

由美子 はい。

恵子が入ってくる。

恵子 よかった。誰もいないかなって思ってた。

由美子 （あー）今日土曜だもんね。

裕美 あたしが頼んで、勉強教えてもらってるんだ。来週の水曜日、試験だから。宏美山口さんはいいよね、推薦で女学院が決まってるんでしょ。

恵子 （うん、あっ）由美子のお姉さん、女学院じゃなかった？

由美子 うん。

恵子 お姉さん、ここの卒業生だよな？

由美子 うん。

恵子 お姉さんの高校生活って楽しそう？

由美子 何で(そんなこと)…

恵子 女学院高校って半分は女学院中学から入ってくるでしょ。うまくやれるか心配で。

由美子 今から行くのやめられるの？

恵子 無理無理、そんなことしたら大変。

由美子 そうだよね、推薦だもんね。

恵子 …

由美子 姉貴、高校すっごく楽しいって言ってるよ。

宏美は不思議そうな目で由美子を見ている。

恵子 それ聞いてちょっと安心した。

由美子 で、どうしたの？

恵子 …昨日録音した放送なんだけど、放送予定、明後日だよ。

由美子 うん。

恵子 もうちょっと、待ってくれない。

由美子 何で？

恵子 今、生徒会企画で先生と交渉していることがあるの。それが決まったら、その報告を付け加えて放送したいんだけど。

由美子 なんかかわかんないけど、それが決まったら、それだけ後から放送すればいいじゃない。

恵子 …

由美子 明後日の放送、何も用意してないから。

恵子 …そう。

由美子 いい放送だったじゃない。

恵子 ありがと…。

由美子 …企画って何？

恵子 タイムカプセル。

由美子 タイムカプセルって、思い出の品とか埋めて何年後かにそれを掘り起こすんだよね？

恵子 (うん)

由美子 何でタイムカプセルを？

恵子 やってみたいくて。何か、自分が企画したことを。

由美子 ずいぶんやってきたじゃない、七つ森の清掃活動、文化祭の劇、それと募金活動もやってたよね。

恵子 自分が始めたもの、一つもないから。全部、先生からやらないかって言われたもので…

由美子 (マイクに口を近づけてインタビューする感じで)あと一ヶ月で、卒業ですね。今どんな気持ちですか。

恵子 …長い三年でした。

由美子 生徒会長として、一番の思い出は何ですか。

恵子 『青い鳥』の上演です。でも楽しい思い出ではありません。私たち生徒会がやりたかった劇は自分たちが作った劇。でもそれは却下されました。『青い鳥』…やりたくなかった。チルチルの役も…、やりたい人たくさんいたから。私、裏方を希望しました。ごたごたに巻き込まれるのが嫌でした。でも担当の山城先生に「生徒会長のあなたがやらなくちゃだめでしょ」って怒られました。「やりたくありません」と言えませんでした。先生に嫌われたくなかったからかもしれません。チルチルをやりたかった人たちが私の悪口を言っていたこと、気づいてました。私が先生に頼んで主役をとったと思っていることも知ってました。「違う」って伝えようと思いました。そしたら、余計疑われることになりました。「ひいきされている人はいいよね」と言われたこともありました。

私は先生に勧められて生徒会長になりました。でもなったからには自分で何かやりたいと思いました。でも、できませんでした、何もできませんでした。

由美子 …山口さんにとって七つ森中学って何ですか？

恵子 …何、かな…

由美子 …ありがとうございました。これで今日のインタビューを終わりにします。

恵子 …

由美子 どっちがほんとの恵子？

恵子 どっちがいい？

由美子 録音、取り直そっか。

恵子 （首を振る）しまっておいた方がいい気持ちもあるから。

由美子 つらいね。

恵子 でも、表に出したらもっとつらい。

由美子 タイムカプセルの企画が通ったら、七つ森中学はかけがえのない宝物になる？

恵子 なるかもしれないって思って。だから、タイムカプセルの企画が通ってから、放送してほしいって思ったの。

由美子 生徒には相談しないの？

恵子 （あっ）ほんとだったら三年生みんなに相談するべきなんだよね。でも…、相談したら、そこでだめになるかもしれないなんて思って。…私のこと嫌いな人、私が提案したことはみんな反対しそうだし。でもね、タイムカプセルに反対する人も二十年後にやってよかったって思うかもしれないし。（あー）結局、私、自分のためにやってるのかな。私って自分勝手だよな…

由美子 恵子。

恵子 …

由美子 タイムカプセルの企画、通るといいね。

恵子 （えっ）

由美子 通るといいね。

恵子 （うん）

由美子 フレーフレー恵子、フレーフレー恵子、フレーフレー恵子。

恵子 （涙がこぼれてくる）

裕美 山口さん。どうしたの？

恵子 生徒会長になってから、先生には応援されてきたけど、生徒から応援されたことなん

てあったかなって。いつも…

由美子 月曜の放送、延ばすから。タイムカプセルの企画が決まるまで。

恵子 ありがと。

暗転

◆二月十六日(月曜日)

放送室の放送機器のから出ているマイクの前に涼子が座っている。

隣で裕美が涼子を見ている。放送室にいるのは裕美と涼子の二人だけ。

涼子のお昼の放送が始まる。それは生放送である。

涼子 みなさんこんにちは、二月十六日月曜日、お昼の放送の時間がやってきました。毎週月曜日は「あなたにインタビュー」を放送してきましたが、今日は予定を変更して「今日の献立から」を放送します。それではミュージック、スタート。(涼子が悲しげな音楽をかけ、そのメロディーに乗って放送する)今日の献立は、カレーライス、クジラ肉ノルウェー風、そして牛乳です。カレーライスは去年の七月、学校食事研究会が行った調査で、「輝け！子どもたちが好きな献立ベスト10」のトップに選ばれた食事です。さあ、今日はそのカレーライスをじっくり味わって食べましょう。

涼子が悲しげな音楽を止める。

裕美が笑っている。

そこに、原田先生が入ってくる。

先生 岸。何、今の放送。

涼子 何か問題でも？

先生 問題でもって、どうしてあんな放送したの？

涼子 別に…

先生 別にして、訳もなくやったの。

涼子 訳はあるよ。

先生 あるわけないでしょ。

涼子 訳もなくやったのって聞いてきたの先生でしょ、だから訳があるって…、そしたらあるわけないでしょって、訳わかんねー。

先生 訳があるのね。

涼子 だからあるって。

先生 (たたみかけて)じゃどんな訳があるって言うの。

涼子 ここじゃ言えねー。

先生 それじゃ、どこなら言えるの。

涼子 (あっ)どこでも言えねー…

先生 やっぱり訳なんかないんじゃない。

涼子 だったらどうだっていうわけ。

先生 もうあんなばかげた放送やめて。

涼子 …

先生 わかった？

涼子 はいはい。

先生 はいは一回でいい。

涼子 (投げやりに)はい！

先生 …

原田先生が放送室を出て行く。

みゆきと由美子が入ってくる。

みゆき どうしたの、原ちゃん怒ってたみたいだけど。

涼子 お説教。さっきの放送のことで。

みゆき あれ、何だったわけ？

涼子 感動的献立紹介。

みゆき 何で、会長のインタビュー流さなかったの？

涼子 あれ今日は流せなくなったから給食の献立紹介してって由美子に頼まれて。ねっ？

由美子 (あっ)うん。

みゆき 何で流せなくなったわけ？

由美子 恵子、生徒会の企画を付け加えたいんだって。

みゆき 何それ？

由美子 タイムカプセルをやろうって企画してるみたい。

みゆき それだけ、別に放送すればいいのに。

由美子 まっ、色々考えがあるんじゃない。

少し前から裕美が紙を見て何かぶつぶつ言っている。

みゆき 裕美、何してんの？

裕美 あたし、放送に挑戦してみようかなって。

みゆき 裕美が？今まであれだけ放送するのいやがってたじゃない。

裕美 (うん)でもね、このままじゃあたし、一回も放送しないで卒業しちゃうから。放送部員なのに。それで、一度放送してみたいって由美ちゃんに言ってみたのね。そしたら由美ちゃんが、明日の「ミュージック・リクエスト」の原稿、あたしのために作ってくれたの。

みゆき 裕美、明後日試験だったよね。

裕美 (うん)。

みゆき 大丈夫なわけ。

裕美 今更勉強してもあたしの馬鹿が直るわけじゃないし、その前に何かやってみようかなって。

みゆき (原稿を手にとって)『春一番』、ずいぶん昔の曲だよね。(原稿を読んで)ふーん。

いいんじゃない。これ、誰のリクエスト？

裕美 あたし。(あっ)変だよ、自分でリクエストして自分で放送するって。

そこに山口恵子が顔を出す。

恵子 ちょっといい？

由美子 (うん)

恵子 今日はごめん、放送延ばしてもらって。

由美子 (うん)

恵子 決まったの。タイムカプセルやっていいって。

由美子 (Vサインを送る)

裕美 よかったね。

恵子 ありがと。

由美子 この前の最後のところから録ればいいんだよね。放送する原稿できてるの？

恵子 (うん)作ってある。

由美子 それじゃ、今録音する？

恵子 いいの？

由美子 (うん)

由美子が録音したテープを再生する。

由美子(テープ) それでは最後の質問です。山口さんにとって七つ森中学って何ですか。

恵子(テープ) かけがえのない宝物です。

由美子がテープを止める。

由美子 この後から録るから。用意いい？

恵子が原稿を取り出す。

由美子が録音を始める。

由美子 生徒会から三年生の皆さんへお知らせがあるそうです。聞いてください。

恵子 旧生徒会は先生方と相談し、タイムカプセルを学校の中庭に埋めることになりました。

みなさんの思い出の品を持ってきてください。タイムカプセルを開けるのは二十年後の、一月一日、午後一時です。二十年後の一月一日に、みんなで七つ森中学校に集まり、二十年前を思い出したいと思います。タイムカプセルの中に入れるものは自由です。体育祭で使ったはちまき、部活で使ったユニフォーム、お気に入りのシャープペン、場合によっては悔しい思いをしたテストでもかまいません。埋めるのは卒業式の翌日の午後を予定しています。三年生の皆さん、生徒会の最後の企画に是非協力してください。

由美子 ありがとうございます。これで今日のインタビューを終わりにします。今日のゲ

ストは元生徒会長の山口恵子さんでした。

由美子が録音を止める。

由美子 放送は明後日、二月十八日の水曜日でいいかな？

恵子 (うん)、ありがと、いろいろ。

みゆき 山口、なんで二十年後なの。二十年って長すぎない。二十年後って私たち三十五歳だよ。

恵子 いろいろ考えたんだけど、やっぱり二十年後かなって、きりがいいし。

みゆき 二十年後じゃ人類が滅亡してるかもしれないよ。それに、二十年後、みんな埋めたこと忘れちゃったりしない。

恵子 一番忘れないのが二十年後かなって。

裕美 あたし来るよ、絶対。

恵子 ありがと。それじゃ。

恵子が部室を出て行く。

裕美 どうなってるんだろう。あたし。

凉子 裕美、二十年後のこと心配しても仕方ねーって。

裕美 今のこと心配しなくちゃね。

凉子 そういうことじゃなくって。

由美子 裕美、明日の録音するよ。

みゆき いよいよ裕美のデビューか。

由美子 裕美、準備いい？

裕美 (うん)

由美子 もし失敗しても取り直しできるから。

裕美 頑張る。

みゆきが新しいテープを出して機械に入れる。みゆきが録音ボタンを押す。

由美子 こんにちは、二月十七日、お昼の校内放送の時間がやってきました。火曜日の今日は「ミュージック・リクエスト」をお届けします。今日の放送担当は、

裕美 犬田裕美です。よろしくお願いします。今日お届けする曲は、キャンディーズの『春一番』。その前に、少しだけ春一番について説明しましょう。みなさんは春一番ってなんだか知っていますか…

裕美の放送の中で暗転

◆二月十七日(火曜日)

暗転の中、笑い声が聞こえてくる。

放送室で由美子、みゆき、裕美、涼子の四人が話をしている。

裕美 『春一番』歌っていたキャンディーズって解散したんだね。知ってた？

みゆき 「普通の女の子に戻りたい」って言って解散したんじゃないっけ。

裕美 普通の女の子か。あたしも戻りたいな。普通の女の子に。

涼子 裕美、普通じゃん。

裕美 普通じゃないよ。普通だったら、教室にも行けるし、クラスの友達とも仲良くなれるし…。ずっと放送室にいるなんて…普通じゃない。

涼子 裕美…。教室に戻りて一のか？

裕美 …

涼子 戻れんのか？

裕美 戻りたい…でも、怖い…

由美子 キャンディーズって、普通の女の子に戻れたのかな。

裕美 (えっ？)

由美子 解散しても普通の女の子に戻った訳じゃないよね。

裕美 …

由美子 裕美、何が普通なんてわからないよ。さっ、昨日のテープ、かけるよ。

裕美 ちょっとどきどきする。

由美子がスイッチを押す。

しかし、音が出ない。

裕美 音、出ないね。

由美子 どうしたんだろ。

みゆき (みゆきが機械を調べて) あー、テープ絡まってる。

由美子 うそ。

みゆき これ、ちょっとすぐには直らないよ。

裕美 どうしたらいい。

由美子 直接放送するしかないか。

みゆき 曲はここにダビングしたのあるから、このラジカセ使って流して、マイクから直接音を拾って流そ。裕美が原稿読み終わったら、私がかかるから。

由美子 裕美、やってみる？

裕美 …うん。やってみる。

由美子 オッケー、それじゃいくよ。

こんにちは、二月十七日、お昼の校内放送の時間がやってきました。火曜日の今日は「ミュージック・リクエスト」をお届けします。今日の放送担当は、

裕美 犬田裕美です。よろしくお願いします。今日お届けする曲は(緊張でつかえつかえの放送になる)、キャンディーズの…『春一番』。その前に…少しだけ…春一番について…説明しましょう(汗、汗)。

裕美が話せなくなってしまう。裕美が汗をぬぐう。裕美は震えている。

由美子 裕美。

裕美は大きく首を振る。

みゆきが裕美の原稿を取って読み始める。

みゆき みなさんは春一番ってなんですか知っていますか？春一番は春の訪れを告げる南から吹く強く暖かい風のことです。春一番の吹く平均の日は、東京では二月二十二日だそうです。ちなみに一番遅い春一番の記録は三月二十日です。年によっては春一番が吹かない年もあるそうです。今年は春一番まだ吹いていません、果たして春一番は吹くのでしょうか。さて、今日はまだ吹かない春一番のかわりに、キャンディーズの『春一番』をお届けします。それではミュージックスタート。

涼子が『春一番』をかける。裕美は固まったまま座っている。

放送室に『春一番』が響き渡る。

由美子 裕美。

みゆきが由美子に静かにという合図を送る。「もうすぐ春ですねえ」のフレーズで裕美が叫ぶ。

裕美 春なんて、春なんて来ない！

裕美が突然走って、放送室から出て行く。

由美子 裕美！

由美子が裕美の後を追って放送室から出て行く。続いてみゆきが、そして涼子が「裕美」と叫んで放送室から出て行く。

『春一番』が誰もいなくなった放送室に鳴り響いている。

しばらくして涼子が戻ってくる。そして曲を止める。

そこに原田先生が入ってくる。

先生 どうしたの？

涼子 先生には関係ねーから。

先生 隣の教室で犬田泣いてたけど…

涼子 だから先生には…

先生 関係あるでしょ。放送部の顧問なんだよ。

涼子 顧問になってたったの一ヶ月で、顧問面すんなよ。

先生 一ヶ月だって顧問は顧問。なりたくてなったわけじゃないけど、なったからには責任があるでしょ。そりゃ、あなたたちにとってはあとちょっと細野先生がやってくれたらよかったんだろうけど、仕方ないでしょ、突然入院しちゃったんだから。

凉子 …

先生 気になってたの。あなたがこの間言った言葉。

凉子 …

先生 あなたこの間「ここじゃ言えない」って言ったよね。あの後、考えたの、何で「今は言えない」とかじゃなくて「ここじゃ言えない」なのかなって。「ここじゃ言えない」のは、ここが放送室だからじゃなくって、そこに犬田がいたからでしょ。

凉子 …

先生 やっぱり。 何で犬田がいて、言えないの。それって犬田が教室に入れないこととも関係ある？

凉子 笑わせたかったんだ。裕美を。

先生 犬田、何でまだ教室に戻れないの？

凉子 そんなのわかりきってんじゃない。

先生 金沢たちのこと？でもあれは解決したって山城先生…

凉子 解決なんてしてねーよ。山城、ちっともわかっちゃいねー。あいつらわからねーようにいじめてんだ。だから…、

先生 この前、金沢たち呼び出して殴ったんだ…

凉子 そうだよ、あいつらにわからせてやったんだ…

先生 そんな理由があるなんて、あなた言わなかったじゃない。

凉子 言えなかったんだよ。だってあたしの言うことなんか全然聞いてくれなかったじゃん。

先生 確かに、そうだったね。それで、わかってくれたの？

凉子 そんなことでわかるような奴らじゃねーから。

先生 あなた、あの後階段から落ちて怪我したって学校休んだよね。あれ…

凉子 だからきたねーんだよ。あいつら、高校の先輩連れてきやがって…。

先生 何で階段から落ちたって嘘ついたの。

凉子 心配かけたくなかったんだよ。親にも、裕美にも。

先生 (そう…)

凉子 でさ、わかったんだよ…、

先生 何がわかったの？

凉子 あいつら殴ったってなんにも変わらねーってこと。

先生 それであのお昼の放送にてととなるわけだ。

凉子 あいつらが変わらねーなら、あたしが変わるしかねーから…

先生 犬田、何でそんな目に遭っているわけ。

凉子 あいつんち、金持ちだから。家もすっごくでっけーし、あいつ休みにいい服着てるし。

先生 犬田、それを自慢したりするの？

凉子 あいつはそんなに奴じゃねーから。

先生 あなたって、思ってたよりずっと…

凉子 悪い奴？

先生 (笑う)

凉子 先生も、思ったよりずっと…

先生 (笑って)全然わかってなかったんだね、私。わかってないことがわかったよ。あなたたちのこと。

凉子 教えようか、あたしたちのこと。

先生 犬田のこと放っておいていいの？

凉子 あいつには由美子とみゆきがついてっから。

先生 あの二人はどんな関係？

凉子 あいつらの仲は本物だよ。あいつら小学校の頃からずっと仲いいんだ。けんかしたことなんて見たことねー。高校も二人とも七つ森高校を希望してんだ。二人で放送部に入るんだって言ってた。七つ森高校って放送部、コンクールで全国大会まで行ってっから。

先生 あの二人、高校でも放送部入るんだ？

凉子 みたいだね。二人とも将来の夢はDJだから。あれ、なんであたしこんなにべらべら話してんだ？

由美子とみゆきが裕美を連れて戻ってくる。

由美子 (あっ)先生。

先生 どうしたの？

みゆき 裕美がお昼の放送のために録音したテープ、絡まっちゃって。裕美の初めての放送が、だめになっちゃって…

裕美 あたし、何やってもだめ。

由美子 (強く)だめじゃないって。裕美、頑張ったじゃない。

裕美 でも、だめだった。あしたの試験も…きっと…

由美子 そんなこと考えちゃだめだよ。

裕美 呪われてるのかな、あたし。

由美子 馬鹿なこと言わない！

裕美 だって…

由美子 (裕美の肩に手をおいて)フレーフレー裕美、フレーフレー裕美。(少し笑って)呪いを解くおまじない。

裕美 フレーフレーっておまじないなの？

由美子 こじつけだけどね(笑う)。

凉子 由美子、どうしてフレーフレーだけなんだ。

由美子 だって？

凉子 応援ってさ、普通フレーフレーの後に頑張れ頑張れとかに移るじゃん。でも由美子の応援、いつもフレーフレーだけだから。

由美子 頑張れって、言われてつらいときがあるから。なんかとってもつらいのに、更に何かやらなくちゃいけないみたいな。実は、私調べたことあるんだフレーって何か。凉子知ってる？

凉子 (えっ)旗とか振るんじゃないの。振れー、振れーって。

由美子 フレーって言葉、英語にあるんだけど、何かはっきりしなくて。でも、そのはっきりしないのいいなって。

みゆき 呪いを解くおまじないにもなっちゃう。

由美子 そんなところ。だから…(裕美に)フレーフレー裕美、フレーフレー裕美。

みゆきが由美子に加わってフレーフレーと言い始める。そして涼子も参加。最後に原田先生も。そんなあたたかいフレーフレーにつつまれた中、暗転。

◆三月六日(金曜日)

暗転の中、涼子の「やったー、七つ森東に合格した」の声。明かりがつく、涼子が放送室に入ってきたところである。

放送室には裕美が一人、椅子に座っている。

裕美 涼子ちゃん、おめでとう。

涼子 奇跡だね。あたしが受かったなんて。七つ森東なんて絶対無理だって思ってたけど。

裕美 でも涼子ちゃんが受かったの、あたしが受かったのに比べれば奇跡じゃないよ。

涼子 由美子とみゆき、どうなったかな？

裕美 受かってるといいね。

涼子 みゆきはまず受かってるでしょ。今まで受けた模擬テスト、全部安全圏だったみてーだし。問題は由美子だよ。

裕美 二人で七つ森高校の放送部に入るんだから、二人とも受かってなくちゃだめだよ。

涼子 (ああ)

そこに由美子が入ってくる。表情が明るくない。重苦しい雰囲気。

涼子 …(恐る恐る)どうだった。

由美子 (うん)受かった。

涼子 やったー。

裕美 おめでとう。

由美子 でも…、みゆきの番号がなかったんだ。

涼子 うそ…

裕美 今、みゆきちゃんどうしてるの？

由美子 わからない。今日は会ってないから。

涼子 みゆきと一緒にいったんじゃねーの、合格発表…

由美子 今日は別々に発表を見に行くことにしたんだ。私、自信なかったから。

涼子 みゆき、どうなんだ？

由美子 二つ森に行くのかな。

裕美 あたしと同じ！みゆきちゃんが？

由美子 たぶん。

裕美 あたし、みゆきちゃんに何て言ったらいいのかな。嬉しいけど、でも嬉しくない。

由美子 話、できるかな。

そこに恵子が現れる。

恵子 ちょっといい？

由美子 何？

恵子 タイムカプセルのことで、放送したいんだけど、いいかな。学校の許可は取ってあるんだけど。

由美子 今昼休みだから、恵子が放送していいよ。

恵子 ねっ、由美子はタイムカプセルに入れるもの決まった？

由美子 まだ。何入れたらいいか迷ってる。

恵子 実は放送部の四人、全員出してないんだ。

由美子 そうなんだ。

涼子 優秀じゃん、あたしたち。

会話の中で由美子が放送の準備を終える。

由美子 どうぞ。

恵子がマイクの前に座る。

恵子 (マイクに向かって)旧生徒会からの連絡です。三月六日現在のタイムカプセルプロジェクトの進み具合を報告します。現在、タイムカプセルに入れるものを提出したのは三年生二百三十人中、二百十一人です。まだ提出していない生徒は是非、三月十五日、卒業式の翌日までに提出してください。二十年後の一月一日、みんなで七つ森中学校に集まり、二十年前を懐かしく思い出しましょう。これで、旧生徒会からの連絡を終わりにします。

この放送中にいつの間にかみゆきが放送室の入口に立っている。ただだれもみゆきが入ってきたことには気づかない。

みゆき 山口。(みんながみゆきを見る)私、タイムカプセルに入れるもの出さないから。私、懐かしく思い出することなんかないから。二十年後、今の私を思い出して何になるわけ。人には思い出したくない思い出だってあるの。

恵子 でも、悪い思い出ばかりじゃなかったでしょ。

みゆき 私、ずっとずっと行きたかった高校に落ちたんだよ。

恵子 …

みゆき 山口はいいよ。高校は推薦で女学院に決まって、劇じゃみんながやりたかった主役になれて、なんでも思い通りになって。でもみんな山口みたいにはいかないんだよ。

由美子 みゆき！

みゆき …

由美子 もうやめて。それ以上言わないで。

みゆき 由美子…、何で山口の味方するんだよ。

由美子 みゆき…

みゆき 由美子はいいいよ、七つ森受かって。放送部にも入れる。でも、私は…

由美子 私、ちっとも嬉しくない。七つ森受かって嬉しくない。

みゆき じゃ、私と一緒に二つ森行く？

由美子 …

みゆき どうなの？

由美子 …

みゆき 行けないでしょ。私、二つ森に行くんだよ。二つ森なんて行きたくない。二つ森なんて、私の行く学校じゃない！

凉子 みゆき！

凉子は裕美を見ている。みゆきがはっとして裕美を見る。裕美は下を向いて何も言わずに椅子に座っている。

みゆき （泣けてくる）私…どうしちゃったんだろ。私、だめだ。もうだめだ。

そう言ってみゆきは放送室を出て行く。

由美子 みゆき！

由美子がみゆきを追って放送室を出て行く。

暗転。